

勇いしやぎよ舟うに

永積安明

沖繩に出かけるたびに、私は八重山の石垣市を拠点にして調査を続けるようになった。そのうちに、いつも泊る定宿ができた。八十をこえた、お婆さんが女主人をしている日本宿である。離島を歩き廻り疲れて帰ってくると、すぐ浴衣に着替えるなり、「お婆あちゃん、お茶だ」と遠慮なくいえるので、私はこの宿が気に入っているのだ。食事の時は、きつと前に座って給仕をしながら、よも山の昔話などをしてくれるこのお婆さんは、明治時代の娘ざかりには機械織りの名手で、八重山上布をどんなに丹精こめて織ったか、織りあげた上布を上納する時、役人の目がどんなに敵しかったかなどを、目に見るように話してくれた。娘時代に手織った美しい八重山上布を拡げて見せてくれたりもするのである。私は和服が好きで、家では着物を着ているのだが、お婆さんの話を聞いたら、何だか和服を着るのが申しわけないような気がしてきた。

ある日調査を終えて帰り、例によってお風呂からあがって食卓の前に座ったら、お婆さんは、自分が作ったという梅酒を盃に注いでくれて、いつものような話になった。

今は水道ができましたが、私の育った竹富島たけとみには水が少ないので、屋根に降ってくる雨水が樋をつたって落ちてくるのを、ためて

おいて使ったものでした。そんな島でもお米を作れというお上のお達しが来ましたが、この島は掘っても石ころが出てくるばかりで、芋もろくに取れないのです。おまけに水もないので、お米など作りようがありません。幸い、向かいの西表島は山が深くても水もたくさんあります。そこで村の人は、田植え時には割り舟を漕いで海を渡ります。熱いお日さんに照らされた海の上を五時間もの間、手漕ぎに漕いで、やっと西表島に着くのです。上陸するとすぐ小屋を作り、田植えがすむまでそこで寝泊りするのです。西表にはマラリヤ蚊がいるので、田植えの間に蚊に刺されると、帰ってからひどい熱が出て、死んでしまう人も少なくありませんでした。そんな田植えがすむと、こんどは草取りのために、また五時間も舟を漕いで、田んぼのある島まで通うのです。その次には稲刈りの日が待っていて、また小屋がけの苦しい毎日が続きます。

お婆さんは話しつづける。ある年のこと、娘の私は、お兄さんが田植えをするのについて行きました。ひと掻きずつ重い割り舟を漕いで、汗びっしょりになった兄さんは、西表島につくなり小屋がけをすると、すぐ田んぼへ出かけます。私はお昼の弁当を作り、お茶をわかしお菓を整えると、頭の上にならず弁当を載せ、右手にお茶入

れ、左手にお菜の包みをさげて、お兄さんの働いている田んぼに行きました。田の間の細い畦路あきみちを通して、お兄さんのいる所まで近づいて行きましたが、どうしたことか足を踏みはずして、あつと思つたに田の中へ落ちてしまいました。

田んぼは泥沼のように深く、私は土の中にずるずると沈んでゆき、足から腰まで泥の中に入ってしまった、まだとまらずに深みに入ってゆきません。私は荷物を落さないように、両手をあげたまま大きな声で、「兄さん、助けてえ」と叫びました。びっくりして飛んできたお兄さんは、まず私の頭の上の弁当を取りあげ、次は右手のお茶入れ、それから左手のお菜の包みを取りあげました。そうして最後に私の手を取って、まるで土の中から牛蒡ゴボウを引き抜くように、私を泥んこの中から引きずり上げてくれました。こんな苦しい田植えが終わって、兄さんは荷物や道具を片づけると、また刳り舟に乗り、ひと漕ぎずつ五時間も漕いで、私たちの島に着いたのです。私は家になどり着いて両親の前に座るなり、「もう私は、お米のごはんは一生たべません。兄さんがあんなに苦しんで作るお米のごはんは、ぜったいにたべません」。そういって大きな声をあげて泣きました。ポロポロと落ちる涙がとまりませんでした。

お婆さんは眼をうるませて、なおも話をつづけた。兄さんの舟を作るのもたいへんでした。竹富島は、お盆おぼんのような島で山がないから、大きな木がありません。向いの石垣島にはおもと岳もあって大きい木があるので、兄さんは石垣島に渡って山に入り、大木を鋸で切りたおすと、山から海辺まで引きおろします。そうして丸太から少しずつ刳りぬいて舟を作るのです。だから何日も何日もかかって刳り舟ができあがった時の喜びは、たとえようがありません。縦か

ら見たたり横から見たたり、前からも後ろからも眺め、刳り舟を撫でさすって喜びました。

だから八重山の島には、「勇ぎよ舟いぢやよふね」（勇ましい舟）という、新しい舟を祝いほめあげる歌がありますといつて、お婆さんは、その歌を謡いあげてくれた。

前に廻り	真面 <small>まて</small> から	拝み <small>ほ</small> ば	前に廻って、正面から見ると、
座 <small>ま</small> しやる親	祖神 <small>うぶかみ</small> 似	笑 <small>わら</small> いつみ	座みの親、祖神に似て笑いつめ、
中間 <small>なかま</small> 廻り	船腹 <small>ふねはら</small> ゆ	拝み <small>ほ</small> ば	中間 <small>なかま</small> に廻って、船腹を見ると、
三日 <small>みかづき</small> 月 <small>つき</small> ぬ	若月 <small>わづき</small> ぬ	腹 <small>はら</small> まり	三日月の、若月の腹のよう、
鱸 <small>うなぎ</small> に廻り	舵目 <small>かじめ</small> ゆ	拝み <small>ほ</small> ば	鱸 <small>うなぎ</small> に廻って、舵 <small>かじ</small> の目を見ると、
乙女 <small>おんな</small> ぬ	あばれ子 <small>あばれこ</small> ぬ	股垂 <small>ももたれ</small> り	乙女の、美しい娘の、股 <small>もも</small> のよう。

これは最高のはやしごとばでもって、進水しようとする舟を讃め称えている、その民謡の一節である。「前・中間・鱸」「真面・船腹・舵目」と対句をかさね、「拝みば」を三度もくりかえし、単純な五・五・四の拍節でもって、率直によるこびを歌いあげている、この歌謡の律動に、私の心も昂まる思いであったが、それも、このお婆さんの話してくれた沖繩離島、「苦の島」とまで呼ばれた離島の、きびしい、それにもかかわらず、いいようないやさしさを保ちえた島人たちの、文字どおりの生活のリズムとして、私を打ってくるからであることが、はじめて私にもわかってきた。文学の形をささえ充足させる内質が、どんなものであるかを、私は宿の女主人、八十歳をすぎた明治育ちのお婆さんから、改めて教えられる思いがしたのである。